

なぞかけの理解と認知構造

油 井 恵

1. はじめに

日本語にはさまざまな言葉遊びがあるが、その一つに「なぞかけ」というものがある。本稿ではなぞかけについて、カテゴリーの観点からその理解のしくみと認知のありさまについて論じてみたい。

2. 「なぞかけ」とは

なぞかけはなぞなぞの一種で、「A とかけて B ととく。そのころは C (C/C')」というパターンにのっとり作られる言葉遊びである。A は「お題」と呼ばれ、B との対応関係を司る C (C') を「ころ」と呼ぶ。A を与えられた後、それに伴って B 以降を考えるという形で作られる。

3. なぞかけの構造

3.1 メタファー：構造 1

謎をかけて解く、ということは「表面的には明らかではない言葉の意味を、何らかの動機づけに基づいて明らかにする」(杉本 2002 : 61) ということであり、その作業には、「文の受動的な意味解釈ではなく、積極的な「意味の想像かつ創造活動」による解釈」(同上) が必要となる。例えば、次の例を見てみよう。

- (1) 「鉛筆」とかけて「雪の結晶」ととく。そのころは、六角形が基本です。
- (2) 「車」とかけて「恋愛」ととく。そのころは、ブレーキが無いと暴走します。
- (3) 「海」とかけて「父の背中」ととく。そのころは、広いな、大きいな¹⁾。

(いずれも宇野 2010)

メタファーとは、「ある概念領域を別の異なる概念領域から理解する」(杉本 1998 : 41) ときの「二つの領域間の写像関係」(李 2010 : 93) である。例えば、

(4) 人生は旅である。

というようなメタファーの場合、図1に示すように、人生に関する概念領域は旅に関する概念領域によって理解される。

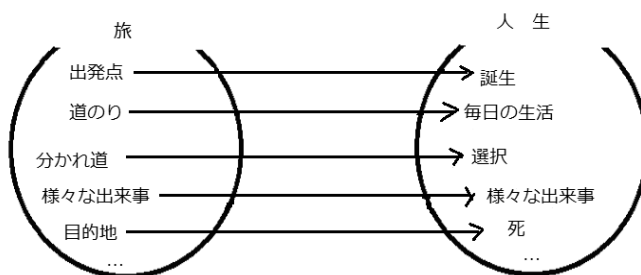


図1 メタファー「人生は旅である」における領域間の類似関係

例えば、起点領域としての旅に関する概念要素である出発点や目的地、様々なハプニングは、目標領域としての人生に関する概念要素である誕生や死、また長い間にはいろいろあることなどに対応する。私たちは、具体的概念である旅に自分たちとそうした概念要素との関係を投射することによって、抽象的概念である人生を理解するのである。これら要素は、概念構造におけるそれぞれの類似点とみなすことができるわけだが、なぞかけの場合、それが端的に表れる。

(1) の場合、お題が鉛筆なので、鉛筆が目標領域に対応する。鉛筆を雪の結晶によって理解する、という形を取るのである。鉛筆と雪の結晶の概念要素にはそれぞれ様々なものがあるが、その中でも外観の断面が六角形だという類似点を取り上げている。(2) の場合、車と恋愛の概念要素の中でブレーキ（歯止めとなるもの）がなければ暴走してしまう（突っ走ってしまう）というのが類似点ということである。

(3) のように、要素が複数の場合もある。(1) を図に表わすと図2のようになる。

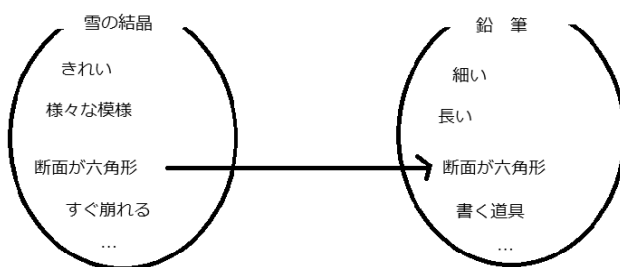


図2 「鉛筆」と「雪の結晶」における領域間の関係

また、このパターンのなぞかけの構造を図示すると図3ようになる。

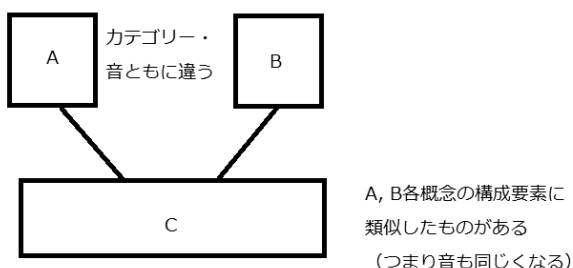


図3 なぞかけの構造 1

3.2 プロミネンス

(1), (2) のように、その概念の要素は多様であっても、(1) であれば六角形という特徴のみに焦点をあてることによってなぞかけは成立させることができる。

すなわち、数少ない、ほとんどの場合はただ一つの要素を認知的に際立たせることによってなぞかけのこころは成り立つのであるが、ここで認知的プロミネンスが高くない要素をあえて選ぶことによって、なぞかけの意外性や難易度が高まるということがある (前田 2005 参照)。

それは固有名がシネクドキとして使用されるときのように (石田 2001 参照)、様々ある要素のうち、ただ一つだけを選ぶ恣意性にどれだけ必然性、あるいはプロミネンスを認知する動機が感じられるか、といったこととも通じるものがあるが、なぞかけの場合、それが必然的でないものを選ぶほうがひねりが出て、出来がよくなる場合が多いということであろう²⁾。

3.3 同音異義語：構造2

前項では概念要素の内容に類似性がある場合について論じたが、内容としては類似していないものの、音が類似していることを利用してなぞかけを成立させるものもある³⁾。

- (5) 病院とかけて NHK ととく。その心は、受診／受信にお金がかかります。
- (6) エースピッチャーとかけてグラビアアイドルととく。その心は、常に完投／巻頭を飾ることを目指します。
- (7) 結婚式とかけて新曲作りに苦勞するミュージシャンととく。その心は、新婦／新譜に新郎／心労はつきものです。

(いずれも W コロン 2010 一部改変)

これらの例では、それぞれの概念領域における概念要素の内容に実はまったく類似性はない。ただ、その内容の表現の音に類似性がある。(5) については、病院と NHK というそれぞれの概念領域において同音異義語を含んだ類似する音の要素が取り上げられている。図4は病院と NHK の二つの領域間の関係を表したものである。

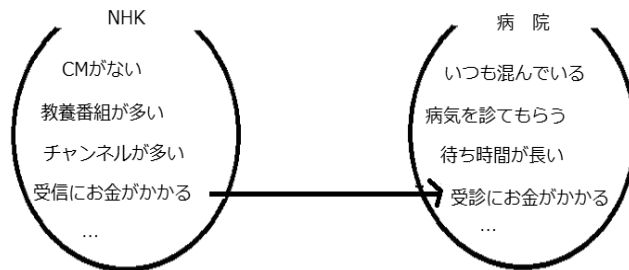


図4 「病院」と「NHK」における領域間の関係

受診にお金がかかることと、受信にお金がかかることは内容として類似しているわけではないが、「じゅしん」という音が同じであるという駄洒落を利用し、その音の類似という一点のみでなぞかけを成立させている。

また、(7) のように音が類似している語が複数にわたる場合もある。ちなみにこの例では「新曲作りに苦勞するミュージシャン」というかなり詳細な概念が出てくるが、このようになぞかけにはお題を解くためにアドホックな概念を対照する領域

に選ぶことがある。

さらに、音の類似は語のレベルにとどまるだけでなく、句のレベルにわたるものもある。

(8) うちわとかけて信号機ととく。その心は、煽がなければ／青がなければ意味がありません。

(9) 鉄砲博物館とかけて干支ととく。その心は、銃に種類／十二種類があるんです。
(いずれも W コロン 2010 一部改変)

これらは構造としては語レベルにとどまるものと同じであり、構造を図示すると図5のようになる。

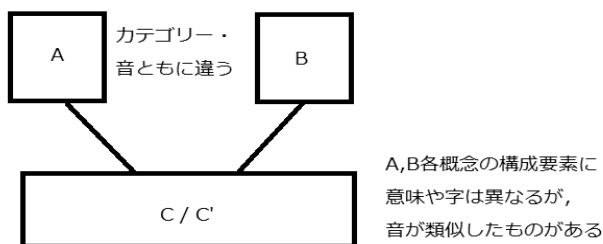


図5 なぞかけの構造2

3.4 イメージ・スキーマ：構造3

なぞかけには、お題についての字面での位置をもう一つの概念領域の要素との類推に利用するものもある。

(10) いろはのろの字とかけて野辺の朝露と解く。心は葉（は）の上にある。

(前田 2005)

「いろは」の「ろ」は縦書きで考えると「は」の字の上にある。その位置が、朝露が葉の上に載っている様子と類似している、ということである。「葉」は「は」と読むことにかけているのであるから、音の類似を利用しているものでもある。

これは、イメージ・スキーマとして考えると、図6のようになる。

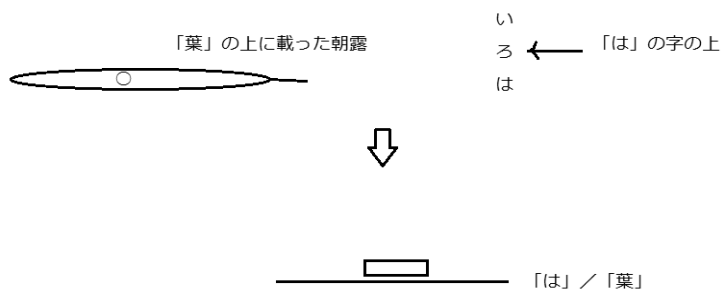


図6 「上」のイメージ・スキーマ

「は／葉」の「上」にある，ということが「ろ」の字と朝露との類似点であり，これは一つのイメージ・スキーマ，つまり図式化された空間に関わる抽象的表示（杉本 1998，李 2010 参照）によって認知することができる。これによって，(10) のなぞかけは理解される。これを構造として図示すると図7ようになる。

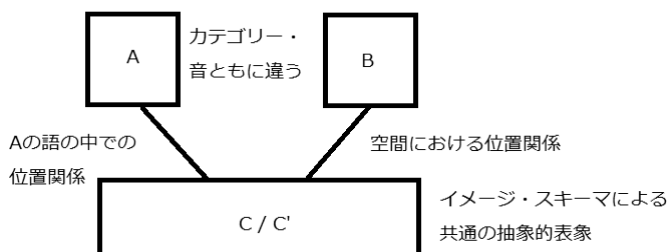


図7 なぞかけの構造3

3.5 字なぞ：漢字の視認性と表意性

最後に，漢字の表意文字（表語文字）としての視認性や表意性を利用したなぞかけがある。

(11) 青とかけて曇天ととく。その心は，どちらも日が出て晴れる。 （前田 2005）

「青」という字に「日」を加えると、「日」はへんとなり、「晴」という字になる。最初の「青」というそれだけで独立した漢字は、「晴」の字のつくりとなるのである。また，この漢字は「天気が良い」という「晴れ」という意味も有する。一方，曇り

空に日（陽）が出れば状況として晴れる。これも前項で扱った字面と実際の概念領域に関するものであるが、漢字の表意性を利用しているため、「こころ」の段階では実際に意味としても通ずるのが前項とは異なる部分である。

このようななぞかけは「字なぞ」と呼ばれている（前田 2005：4）。これも構造としては視覚経験に頼ったものとなるが、スキーマと呼ぶにはあまりに個別具体的であると見えよう。

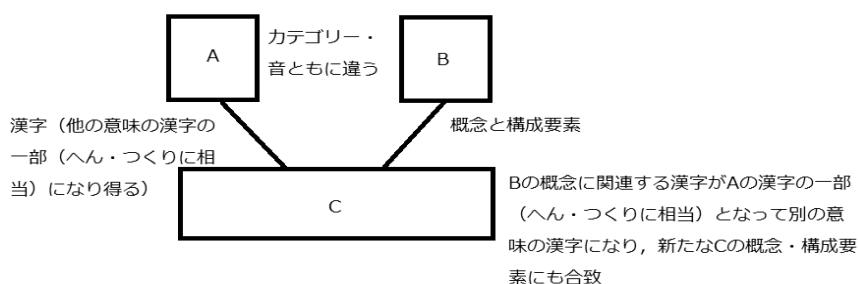


図8 なぞかけの構造4

4. おわりに

以上、本稿ではなぞかけの理解に関わる認知構造について、具体例を挙げながら論じた。なぞかけは言語理解に関するさまざまな認知活動を喚起するものであり、またそれを意識的に試す言葉遊びである。理解に関わる認知構造が明らかになれば、その生成もある程度方法論的に可能とも言えようが、その際の「遊び」としての面白さは、背景文化的な知識とともに工夫が必要となるのであろう。

註

- 1) 「広い」ことも「大きい」ことも海（うみ）の概念要素に違いないが、この言い回しは童謡「うみ」の歌詞の一部である。日本語文化に詳しい者にとっては、「こころ」に幼少時に慣れ親しんだ童謡の一部が使われていることもこのなぞかけの面白みを増す要因になるであろう。
- 2) あまりにわかりやすい要素を選ぶと、なぞかけとして簡単になり過ぎ面白くなくなるが、あまりにもわかりにくい要素を選べばそれはそれで難しすぎて面白くなくなってしまうのは、言葉遊びの故であろう。

- 3) 確かに音は類似しているが, 厳密に言うと実際はアクセント等が異なるものも少なくない。

参考文献

- 石田秀雄. 2001. 「固有名の普通名詞化—メトニミーとシネクドキとの関連から—」
『大阪教育大学英文学会誌』 46巻. 123-132.
- 杉本孝司. 1998. 『意味論 2—認知意味論—』 くろしお出版.
- 杉本孝司. 2002. 「なぞなぞの舞台裏 その理解と認知能力」 大堀壽夫編. 『認知言語学Ⅱ : カテゴリー化』 59-78. くろしお出版.
- 前田実香. 2005. 『言葉の関連性を用いたなぞかけ生成とその評価』 筑波大学大学院博士課程システム情報工学研究科修士論文.
- 李在鎬. 2010. 『認知言語学への誘い 意味と文法の世界』 開拓社.

資料

- 宇野章午. 2010. 「なぞかけとは？」 「宇野章午のなぞかけ道場」
<http://uhb.jp/an/nazokake/nazokake.html> (2010年9月13日参照)
- W コロン. 2010. 『なぞかけで「脳活」!』 東邦出版.